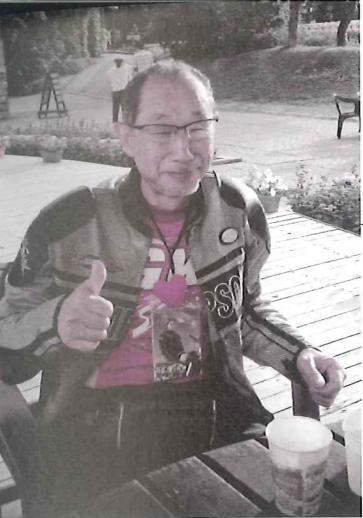


息子との約束

バスケースに入った写真とともに走る

文・柳原三佳 ノンフィクション作家

昨年の夏、ご一緒にさせていただいた北海道ツーリングで微笑む松原道明さん。首にかけたバスケースの中には、亡き息子・和明さんの写真が……。どこへ行くときも、ふたりは一緒に走る。



福岡空港から電車で約30分、博多湾にほど近い姪浜駅を降りると、松原道明さんが手を振りながら、「ミカさん、お久しぶり」と、明るい声で迎えてくれた。「その節はお世話になりました」私がそう言って頭を下げる、「もう骨はくついたかな?」

ちょっと苦笑いを浮かべながら、駆前に停めてあつた車へと私を案内してくれた。

白い軽自動車の助手席には、茶色い巻き毛の愛らしいブードルが2匹並んで待っている。窓越しに私たちの姿を見つけると、嬉しそうにピヨンピヨン飛び跳ねた。

「うちの子供たちです。コロンくんと、シユウくんっていうんですよ」

甘える愛犬たちを優しく撫でながら、松原さんはそう言つて目尻を下げた。松原さんは昨年、一度のツーリングをご一緒させていただいた。一度目は、夏の北海道。全国各地に住む5人のメンバーが札幌で集合し、満開のラベンダーが放つ爽やかな香りを胸いっぱいに吸い込みながら、5台のバイクを連ねて走った。

二度目は、秋の九州。今度は福岡で集合し、銀色のすすきの穂が揺れる雄大な秋の阿蘇山を走つて、大勢のライダーが集まる「PEACE RIDE 2014」にも参加。ケニー・ロバーツとも会うことができた。ツーリングクラブの長老(?)なんて言つたら怒られてしまうかもしれないが、愛車のヤマハMT-09にまたがつた松原さんの

姿はとても68歳とは思えない。コーナリングは軽やかで、そのスリムな後ろ姿は、どう見ても20~30代の若者だ。秋の九州ツーリングは松原さんの地元ということもあって、福岡市内に住む次女の美知恵さんも、ホンダCBR600F4-iを駆つて参加してくれた。美知恵さんは153cmと小柄ながら、そのライディングテクニックはお父さんの上を行くほど。これまで私が出会った女性ライダーの中でも、間違いなくベスト3に入るだろう。

どうしてそんなに乗るのが上手なの? とたずねると、「子どもの頃から父に乗らされてましたからね!」と、美知恵さんは笑いながらそう答えてくれた。

一ジ展を通じて知り合つた遺族仲間だ。面倒見がよくて、いつも明るく、大のバイク好きの松原さんも、実は10年前に極めて理不尽な事故で、大切な一人息子を失つた遺族の一人だった。

白い軽自動車の助手席には、茶色い巻き毛の愛らしいブードルが2匹並んで待っている。窓越しに私たちの姿を見つけると、嬉しそうにピヨンピヨン飛び跳ねた。

「うちの子供たちです。コロンくんと、シユウくんっていうんですよ」

甘える愛犬たちを優しく撫でながら、松原さんはそう言つて目尻を下げた。松原さんは昨年、一度のツーリングをご一緒させていただいた。一度目は、夏の北海道。全国各地に住む5人のメンバーが札幌で集合し、満開のラベンダーが放つ爽やかな香りを胸いっぱいに吸い込みながら、5台のバイクを連ねて走つた。

二度目は、秋の九州。今度は福岡で集合し、銀色のすすきの穂が揺れる雄大な秋の阿蘇山を走つて、大勢のライダーが集まる「PEACE RIDE 2014」にも参加。ケニー・ロバーツとも会うことができた。ツーリングクラブの長老(?)なんて言つたら怒られてしまうかもしれないが、愛車のヤマハMT-09にまたがつた松原さんの

姿はとても68歳とは思えない。コーナリングは軽やかで、そのスリムな後ろ姿は、どう見ても20~30代の若者だ。秋の九州ツーリングは松原さんの地元ということもあって、福岡市内に住む次女の美知恵さんも、ホンダCBR600F4-iを駆つて参加してくれた。美知恵さんは153cmと小柄ながら、そのライディングテクニックはお父さんの上を行くほど。これまで私が出会った女性ライダーの中でも、間違いなくベスト3に入るだろう。

どうしてそんなに乗のが上手なの? とたずねると、「子どもの頃から父に乗らされてましたからね!」と、美知恵さんは笑いながらそう答えてくれた。

病院に着いたとき息子はストレッチャーに乗せられ、すでに心臓が止まっていた。おそらく即死状態だったのでしょうか……」

当時、和明さんは31歳。福岡県内の大学を卒業し、仕事を順調。事故の4日後には、婚約者のお宅に挨拶に行く予定だった。

病院から和明さんの遺体を引き取った後は、通夜、葬儀と慌ただしく時間がだけが過ぎていった。しかしその間、松原さんのもとに警察からはなんの連絡もなかつた。

「とにかく、最初の電話で聞いた『左折車との事故』といふこと以外、詳しい情報は何も入ってきませんでした。加害者はいつたい誰なのか、息子に非があつたのか、無かつたのか……。それすらわからなかつたんです」

そんな中、お悔やみに来た参列者の何気なく発した言葉が、松原さんと家族の胸に突き刺さつた。

IMTCのメンバーは、このメッセ

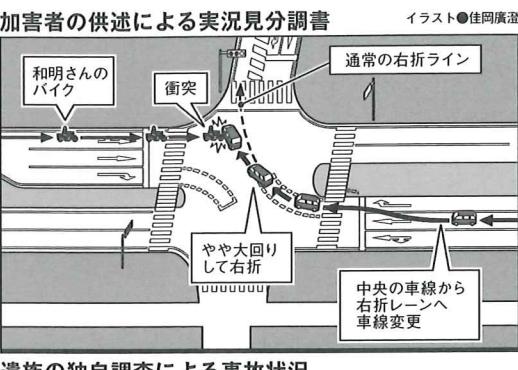
実は、恥ずかしながら私はその九州ツーリングの最終日、熊本県内を走行中に転倒し、右腕を骨折した。「台風がきていて……なんて苦しい言い訳をするつもりはないのだけれど、直線にもかかわらず前輪を滑らせてしまつたのだ。

あのとき一緒に走つていたメンバーには大変心配をかけてしまつたのだが、「骨折で済んでよかったです」「命が無事で、本当によかったです」皆、心からそう言つてくれた。

『生命のメッセージ展ツーリングクラブ』、頭文字をとつて『IMTC』。これが私たちのクラブの名称だ。

平均年齢は余裕で50歳を超えているけれど、みんなバイクが大好きで、いざライディングウエアとヘルメットを身に着けると、年齢のことなどころつと忘れてしまう。

『生命のメッセージ展』とは、事故や事件で理不尽に命を奪われた被害者の等身大のパネルと、その人が生前に愛用していた靴を展示するアート展のこと。大学に入学したばかりの息子を飲酒ひき逃げ事故で失つた鈴木恭子さんという女性が2001年に始めて以来、全国各地で開催され、命の大切さを訴え続けてきた。



※車線減少のため、ほとんどの直進車は外側の車線を走行。地元であり、自宅へのルートを走行する加害者も例外ではないと推察される。

●右直事故の多くは直進するバイクが右折するクルマの正面、または斜め側面に衝突する。●しかし和明さんのバイクは、加害者のクルマ側面にはほぼ直角に衝突していた。●それは加害車両が通常の右折ラインを大きく外れて走行した証左であり、またはそれは団の下方向から信号無視で交差点に進入したクルマの走行と同等の行為でもあった。●加害者が自宅へ戻る最短ルート(交差点の先・団の左方向)では夜間検問実施の場合があり、それを思い出した飲酒運転中の加害者は裏道へ入るために急なハンドル操作で右折。結果、衝突事故を起こしたと遺族は推察した。

「とにかく、最初の電話で聞いた『左折車との事故』といふこと以外、詳しい情報は何も入ってきませんでした。加害者はいつたい誰なのか、息子に非があつたのか、無かつたのか……。それすらわからなかつたんです」

そんな中、お悔やみに来た参列者の何気なく発した言葉が、松原さんと家族の胸に突き刺さつた。

IMTCのメンバーは、このメッセ

ものだった。なんと、飲酒、ひき逃げ、さらに極めて強引な右折であつた可能性が高いにもかかわらず、「危険運転致死傷罪」での起訴を見送り、加害者を「業務上過失致死」(当時)で起訴したのだ。

松原さんは何度も食い下がった。

「危険運転とはいつたい何をさすのか?お酒を飲んで運転する行為は、まさに故意ではないのか?」

そして独自の検証結果も検察官に提出したが、検察はそれを採用することなく、

「明らかな信号無視やスピード違反も加わらなければ、危険運転の要件には該当しない」

そう回答したという

結果的に、懲役4年の求刑に対しても下された判決は、懲役2年8月という

さらに軽いものだった。

悪質な運転によって和明さんの命を奪われた喪失感に加え、司法から次々と受けた「仕打ち」ともいえる苦しみ……。次女の美知恵さんは、当時のこ

とをこう振り返る。

「ある日の夕方、私が実家に立ち寄ると、母が電気もつけずに薄暗い部屋の中で一人ぼんと座っていたんです。あんなに明るかつた家庭が、兄の死を境に、まさに火が消えたように暗くな

た。次女は、この空間にたしかにあつた

和明さんの事故から2年後、松原さんは、「飲酒・ひき逃げ事犯に厳罰を求める遺族・関係者全国連絡協議会」に参加し、大々的な署名活動に取り組んできた。

この協議会は、活動10年間の累計で60万3080筆の署名を集め、法務大臣に提出。そして平成25年11月27日、ついに「自動車運転死傷行為処罰法」の成立にこぎつけた。

この日、テレビのニュース映像では、国会の傍聴席で成立を見守る遺族たちの姿が何度も映し出された。その中には、福岡から永田町の国會議事堂まで乗っていたバイク。ひしゃげたフロントまわりが、事故の凄惨さを無言で物語る。



松原和明さんが乗っていたバイク。ひしゃげたフロントまわりが、事故の凄惨さを無言で物語る。

去年のツーリングで、満開の富良野のラベンダーフームに到着したときも、夕張で「幸せの黄色いハンカチ」のロケ地に行つたときも、美瑛に青い池を見に行ったときも、そして、秋に阿蘇山を走ったときも、草千里で激し

て、ぎくしゃくしているのを肌で感じました。でも、私はそれを少しでも元に戻してから、このままではきっと兄ちゃんも悲しむだろうと思つて……」

それからしばらく経つて、美知恵さんは1匹のブードルの子犬を抱いて実家に出向いた。今からでもすぐに飼えるよう、ドッグフードも、サークルも、おしつこシートも、全て完璧に揃えて。私は両親に、「この子は事情がありますが、初めてのうちは、やはり怖くてバイクに乗れませんでした……」しかし、美知恵さんの耳の奥にずっと残っていたある言葉が、再びバイクへと突き動かした。

「あれは兄ちゃんと一緒にツーリングに行って、待ち合わせ場所で友だちを待っているときでした。兄ちゃんが私にこう言つてくれたんです。『おまえは自慢の妹や』って。ちょっと嬉しくなつて、『どうして?』と聞き返すと、『女の子なのに大型バイク乗つて、上行いながら、法律の矛盾点を伝えるたと頑張つてみたいと思つています』飲酒運転の撲滅が、現在のライフケークだという松原さんは、今も大学をはじめ、警察学校などで講義や講演を行なっており、法律の矛盾点を伝えるために積極的な活動を続けている。

原さんは自身のカメラで和明さんを撮影した一枚だった。

「私は、和明さんの誕生日。そして松原さんの首には、いつもバスケースに入つた和明さんの写真がかけられている。ブルーと黒のライディングジャケットに身を包む和明さんは、写真の中でつっこり微笑んでいる。その写真は松原さんが自身のカメラで和明さんを撮影したものだ。だからね、ミカさん、腕が治ったんだ。だから、今年も走りに行こう。これは約束なんだ。最後に交わした、息子との約束だから……」

松原さんは、なぜバイクに乗り続けた。松原さんは、なぜバイクで旅を続けるのだろう。なぜ、バイクで旅を続けるのだろう。本当はバイクになんて二度と乗りたくない、そう思ったことはないのだろうか。ツーリング中、松原さんの後ろ姿を追いかけながら、ふと気づくと何度も疑問が頭をよぎつた。そんな私の思いを見透かしたのだろうか、松原さんはこう切り出した。

「どうしてバイク事故で息子を失った僕が、今もバイクに乗つてゐるのか……、ミカさん、知りたいよね?」

私はうなずいた。

「実はね、亡くなる少し前に息子が僕にこんなことを言ったんよ。『僕ら家族は、今もこうしてバイクに乗つてゐる。どんなに安全に乗つてもバイクは弱者。何かことが起こることだつてあると思う。』

でも、万が一何かが起こつて、3人のうち誰かがそなつても、バイクが悪いんじゃない。バイクのせいにだけはしないでほしい。バイクが好きだから、乗り続けよう、乗り続けてほしい……」

そのときは何の現実味もなかつたけど、僕は息子に『わかつたよ』と言つた。



次女の美知恵さん(右)が優しい嘘ついでプレゼントしたブードルは、悲しみに沈んでいた家族に笑顔を取り戻してくれた。

心をなんとかして暖めたかった。

松原さんは語る。

「本当にコロンには癒されました。あの子が我が家に来てくれなかつたら、どうなつてしたことか……娘の思ひやりには本当に感謝しています」

実は、「ペットショップから頼まれた」というのは、美知恵さんが必死でついた嘘だった。本当は自分の貯金をはたいて、子犬と飼育セットを買い揃え、両親にプレゼントしていたのだ。

今、松原家では、長女、次女宅合させて、ブードルは4匹に増えた。

もちろん、美知恵さん自身も仲良しだつた優しい兄を亡くした喪失感はあまりに大きく、それを受け止めるには時間がかかった。

「兄が亡くなつてから10年になりますが、初めのうちは、やはり怖くてバイクに乗れませんでした……」

しかし、美知恵さんの耳の奥にずっと残っていたある言葉が、再びバイクへと突き動かした。

「あれは兄ちゃんと一緒にツーリングに行って、待ち合わせ場所で友だちを待っているときでした。兄ちゃんが私にこう言つてくれたんです。『おまえは自慢の妹や』って。ちょっと嬉しくなつて、『どうして?』と聞き返すと、『女の子なのに大型バイク乗つて、上



執筆後記

記事中でも紹介した『生命のメッセージ展ツーリングクラブ』のメンバーとともに、昨年7月、夏の北海道を走っていました。千葉県在住の私は、ホンダドリーム札幌にて真っ赤なホンダCBR250Rをレンタル。そうなんです、これは新車・中古車の販売だけでなく、レンタルバイクを利用できます。飛行機で北海道へ向かい、現地に降り立つたらレンタルバイクで道内をツーリング。購入のための試乗を兼ねてレンタルするものもあります。詳しくは、ホンダドリーム札幌までどうぞ。●北海道札幌市白石区北郷4条2丁目2-1 TEL.011-871-0055 http://www.dreamsapporo.com/ 営業時間:10~19時(10月~翌年2月は10~18時) 定休日:毎週水曜日と第2・3火曜日

手いし、かつこいいから』……って

一人でバイクに乗つていると、優しくつた兄の和明さんのことを思い出し、ヘルメットの中で涙がぽろぽろこぼれて前が見えなくなることもあつた。

「でも、いつだつて兄ちゃんが守つてくれている、守られている……。『自慢の妹や』っていう、あの言葉があつたから、私はこれからも、ずっとバイクに乗り続けようと思えるんです」

法律等での講演を通して

あの日から、11年目の春を迎えた。今も松原さんの自宅ガレージには、和明さんが事故時に乗つていたバイクがそのまま保管されている。折れ曲がったフロントフォークにはその瞬間に加わった大きな衝撃の痕が刻まれ、死の寸前まで握られていたグリップは信じられないほど大きくずれている。今ではこのバイクだけが、事故の真実を物語る証人だ。

ガレージの中から外へと目を移すと、正面にはのどかな田園風景と小高い山が見え、ゆつたりとした時間が流れている。

「ここで息子と一緒にバイクを整備しながら、ああでもない、こうでもないけれど、その瞳にはほんの少し光るものがあつたように、私には思えた。

松原さんは、なぜバイクに乗り続けた。けれど、その瞳にはほんの少し光るものがあつたように、私には思えた。

「ここでは息子と一緒にバイクを整備しながら、ああでもない、こうでもないけれど、その瞳にはほんの少し光るものがあつたように、私には思えた。

「ここでは息子と一緒にバイクを整備しながら、ああでもない、こうでもないけれど、その瞳にはほんの少し光るものがあつたように、私には思えた。